

こむぎの院ゐんの御宇きよに、きうしゆ二

ねんのころ、とはの院ゐんのせんとうに

一人のけちよあり、のちにはたまもの

まへとそ申ける、天下てんかふさうのひしん

にて、こくちうたい一のけん女なり、

くもゐのうちにみよのかんさしこ

まやかにして、いしやうにたきものを

せされとも、らんしやのにほひかうはし

くして、かたちつくるひせされと

も、ひめもすにたうりのよそほ

ひをほとこし、てうあひきはま

りなし、ゐん中の人々たかきも

いやしきも、これをもてなしか

しつかすといふ事なし、ひとへ

に天人てんにんのへんけかともおほ (一才)

え、としのよはひはたちのうちとそ

見えにける、

かゝり ければ 急いりよ

ふかく おほし めされて、

急みをふくみ ことはをやはらけ、

ないてん けてん、 ふつほうせはう

までも、 いさゝかの つまつき

なく、 いちくにしやくし

申されけり、すこしもほんせつにたかはす、

(1ウ)

あまりのふしきぎに、物を御たつね

ありて御らんせむとおほしめし、

たつねおはしますやう、そもく

しやうけうの中には、ほんなふそく

ほたひ、しやうしそくねはんとい

へり、日々夜々をこるところのねん

は、みなほんなふなり、このほんなふ

をはたらかきて、ほたひに入ねは

むをせうすへきかと、おほせられけ

れは、こたへて申やう、くわこのこつ

いんにひかれて、なんによのかはりは

候へとも、みのうちのふつしやうほん

しやういちたいのことなれば、なんによ

のふとうあるへからす候、ほんなふ

すなはちほたひなりといへとも、おも
(2ウ)

ひにまかせ、ほんなふをおこせは、い
よくほんなふそうちやうす、身に
かひきやういきをほんとす、こころ
にしやうしをいとひて、ひとへにほた
ひをおこすへし、あくのすゝむるゆ
へに、ほんなふの風あらくふひて、
ふつしやふのちすひことくくこほり
なれども、せんしんのゑにちたかくかゝ
やくとき、ほんなふのこほりとけて
水となる、せんあくのこしにおひて、
ふ一ふ二なるかゆへなり、たまくちやう
に入て、さひてをあらはんとすれ
とも、さんらんのなみきほひおこり
て、一ちんもきよからす、まれにふつ
そうにむかひて、めいめんをさとり、
(3才)

月にてらさんとおもへは、ほんなふの
くもあつておほひ、ちやうやのやみふ
かし、おこるところのほんなふまう
さうにめをかけすして、さんらんしんの心
者しゃなにもそ、まうしん心しんいつれ
よりおこるそと、ねはんのたうくわ
をあらはして、たちまちにめうたひ
をせんすへし、ちえもなくたうしん
もなき人のまへには、ふつほうせはう
へたてありといへり、けんみつ二はう
のうちうちにいつれもみなしつそうなり、
せほうの中、めのまへのふつほうをしら
すして、ほたひをとをしとおもふ、た
とへは、一しをへたてゝせんりとおもひ、
しよしやくを万里はんりとおもふかことし、

(3ウ)

せけんしゆつせひとして、またくへ

ちのものにあらず、さとりとさとら

さるとのちかひなり、さとりをひらき

たまへる大しせんとかきたまへ

るほんもんに、すこしもたかはすと

申たりければ、めんをはしめまい

らせちやうけきくをよふほとの人々、

したをふるはさすといふことなし、かさ

ねておほせらるゝやう、によしやうの

かやうにちえさいかくのある事は

むかしもいまも見すきかす、りう

女のさいたんかとおほせける、世

中のふしきの事、さてもおほき

中に、てんにかわににたるものあり、あ

まの川かはとなつてたり、そらにかは (4才)

のあるへきかと御たつねありけるに、

そのときたまもこたへて申あくる

やうは、ししやうのおもてにめいく

にとけは、いかてかしろしめさて候

へき、きやうにはたいしやくのりたま

へる大さうの、いきとこそみえ候へ、

わたくしのれうけんには、一さいのもの

にせいと申ものゝ候へは、くものせひと

こそおほえ候へ、其ゆへは、くもといふは

てんちのいきなり、月のいてたまひ

たるときは、あまのかはときこえ、あめ

のふるときは、あまの川ます、雲くも

ねつしあつき時ときはあめふり、くもの

はるれはあめなきかゆへに、くもの

なかにあまのせいとして候かと申 (4ウ)

あける、これにつけて又おほせ

いたさるゝやうは、あまのかははくも

のせいとまことにおもしろし、さ

あらは さてしやうわう しやくひやく

のなかに、 れんけのせい

いつれそと おほせ いたされ

ければ、 そのとき たまも

こたえて 申ける やうは、 (5才)

しやうれんけをせひとして候と申
あくる、又ていわうおほせいたされ
けるやうは、一さいのたまの中に
はいつれをせひとすへきとおほ
せられければ、によひほうしゆを
せひとして候、又うみには大かいを
せひとす、又はもろくのやまの中
には、しゆみせんをせひとつかま
つり候、又もろくのかねのなかには、
こむかうをせひとつかまつり候、も
ろくのけたものうちには、しゝ
わうをせひとつかまつり候、もろく
のきやうのうちには、ほけきやうを
せひとつかまつり候と、いちくくに
こたへ申ける、をよそ一をとへは十
(6才)

をこたへ、あさきよりふかきにいた
るまでとはせたまふに、しらすと
いふ事なし、まことにこんしやの
けんけかとおほしめして、うちとけ
かたくおほしめす、うへはけしやうの
まへとなつけたまへとも、御きそ
くはひとへに女御によこかうゐること
し、あるときなか月廿日あま
りのころの事なるに、あきのな
こりをおしませ給て、せうりうてん
にして、しいかくはんけんの御あそひあ
りけるに、あんはけしやうのまへ
を御そはにをかせたまひて、みす
のうちにわたらせたまひけるに、
折ふしあらしはけしくふひて、

(6ウ)

とうろのひをふきけすところに、

けしやうの まへの みより ひかりを

はなち かゝやかる、 これは

いかなる ことそと 大しん くきやう あや

しみて 見めくらす ところに、

みすの うちより いてたる

ひかり な^り、 (アオ)

あき日のひかりにことならず、くはん
けんをさしおきて、ひかりのあやし
き事をぞうもんせんとするどこ
ろに、ていわうおほせいたざるゝや
うは、ふしきの事なり、これなる
をんなの身よりひかりをはなち
たるこそふしきなれ、せけんの事
をかゝみにかけたるかことくに申
たにもふしきなるに、をのつから
らんしやのほひありて、ひかりを
はなすは、こんしやにもあらず、しつ
しやにもあらず、ひとへにたゝふ
つほさつのきやうかひなり、むかし
かせうそんしやのめんゑんをきくに、
まつしき女にんにてまします (8才)

か、こかねを一りやうみつからしよ
うにはせずして、はくしにあつらへて
はくとなし、たうのうちに御めん
さうのはけたるほとけのあるを
さいしきて、はくしとともにふつたう
ならんとちきりたりけるか、そのゝ
ち五十一こうかあひた、むまるゝた
ひことにこんしきのひかりをはなち
て、つゐにほとけの御てしとなつ
て、かせうそんしやといはれたまへ
ることも、ほとけにはくのゑんくち
すして、そのみこんしきにして、によら
いのしやうほうをつたへ給ひしなり、
この女人のなひてんけてんくらから
すして、ちえさいかくの人にすくれ、
(8ウ)

身よりひかりをはなちにほひを

いたすは、せんしやうにいかなるせん

こんをかうへけんと、かへすくふしきに

おほし、ふしんのことあらはみなく

たつね申せと のせんし ありて、

みすを あけ させ たまひ

ければ、 ころは 廿日 あまりの

よひやみ なれとも、 たゞ ひる

よりも あきらかなり、 (9才)

此ほどはけしやうのまへと申つ
れども、いまのひかりにつけて、
たまものまへとぞ申ける、かやうの
ありかたきけんけの人には、たま
ものまへと申へしと、おほせいたさ
れたまひける、されはこのひかりをは
なちてよりは、すこしおそろしく
おほしめして、御かたはらにはさふら
ひけれども、日ころのやうにはおほ
しめさゝりけり、さるほとに、すゑさ
にさふらひけるわかつてむしやう人、
すゝみいてゝ申されけるやうは、くはん
けんをは、かたのことくさうてんをは
つかまつりて候へども、五いんと申
事をあきらめず、くはんけんと申は、
(10才)

五いんをこころへて、ときのちやうし
をふんみやうにしりてこそ、そのけう
もかんもよほしきふらふらし、五
ゐんにくらくてはなりかたし、五
ゐんのをこりをあきらめ候へきと
申されければ、そのときたまものまへ
こたへていはく、それ五ゐんと申は、五
そうのいきよりわかれて候、そうて
うは、かんのそうよりいてたるいき
のね、これははるなり、一さくのさう
もへのしやうするときなれば、よろ
こひとするゆへに、よろこひのい
ゑたまむる、わうしきは、しんのさう
よりいてたるいきなり、これはなつな
り、一さくのちやうもへはみななかなむる
(10ウ)

ゆへによつて、よろこひのこゑなり、
いちこつてうは、ひのさうよりいで
たるいきなり、とようをつかさどる
なり、つちはいつもをとらふる事な
し、よろつものをはこくむたの
しみあるによりて、よろこひのこゑ
なり、ひやうてうは、はいのさうより
いてたるいきなり、これはあきをつか
さどるなり、あきはなうもくその
いろかはり、かせのをともさひしく、し
かのねむしのこゑもあはれをもよ
ほすゆへに、あはれみのこゑとさた
むるなり、はんしきは、しんのさうより
いてたるいきなり、これはふゆを
つかさどるなり、なにゝつけてもき
(二)オ

はまるしふんなり、これにんけんに

たとへ、ちやうみやう六十ねんなり、夢^{ゆめ}

のうちゆめを見るもはやし、き

のふはけふのむかし、けふはあすのい

にしへ、うつりかはるよのならひ、ふゆう

といふむしのあしたにむまれて、ゆふ

へにしするよりもはかなき身、かし

らのゆき、ひたいにはとし月なみ

をたゝみて、うせきなみたにうるほす、

かるかゆへにかなしみのこゑなり、かやう

によくくしやうして、てうしをまぐる

なりとかやうに申ける、御さにつら

ならせ給ふ大しんくきやう、いちどう

にしたをふりみゝをおとろかして、と

かく申にをよはすとぞ申されける、(二)ウ(

またそのとき、ひわのやくをする人

それひわをは大かたそうてんつかま

つりて候へとも、いかなる人のつくりは

しめ、またはひきはしめてあるやらん、

こんけんをしらすと申されければ、

そのとき たまものまへ ことへていはく、

それひわは、 ふつきしんわうの

つくり はしめ給ふか、 なかさ

三しやく 六寸に かたとるなり、

それいちねん中 三百六十日にひやう

し七つのをかけ申と申ける、 (12才)

又よこふえのやくをする人とひた

まふやう、よこふえをは大かたきはめ

てさふらへとも、それふえのみなもとを

しらすと申されければ、たまものま

へこたへて申やうは、それふえは、ばかん

と申人のつくりはしめたり、あると

きいけのほとりをすくるに、みつ

のうちにれうのきんするこゑ三たひ、

あまりにおもしろきに、なをきかん

とやすらひければ、やかて天にあかり

ぬ、そのゝちたけをきりてふくに、

すこしもたかはすさふらふなり、又

うてきといふ人、七さいにてわう

くうにそなはりぬ、てんか大きにかん

はちす、わうかなしひたまふほどに、

(13ウ)

ゆめにみたまふやうは、ふえふたつ
えたまふ、ひとつをはうてきといふ、ゆ
めさめてひとつふきたまへは、あめお
ひたゝしくふり、又そのゝちひとつ
のかんてきふきたまへは、やかててん
はれてあめやみぬ、

さてこそ 御代もひさしく

たもちたまひえ こ さふらふと申ける、

扱 さそのつきに又

しやうのやくを

つとめて□く をはつとめ候へとも (14才)

しやうの　こんけんを　しらす候と

ありければ、　たまもこたへて　申やう、それ

しやうは、　まいくわと　いひし人

つくりはしめたまふか、　こしより

うへはおんな、　こしより　しもは

しやにてさふらふなり、

しやうをつくりて　ふきしかは、　六月に

しものふるごと　おひたしと申ける、　(14ウ)

又ある人、たいこはいかにととひたまへ
は、たまもこたへて申やう、それ大こ
は、しんのほうこうといふひとつくり、又
ほうわうさんといふ所に、いしのつゝ
みあり、なるときはてんかきくもりあ
めふるなり、又かねはふしといひし人
いはしめける也、又すゝりとふてすみ
はとゝへは、こたへて、それすゝりはし
ろといふものつくりて候、ふてはもうし、
すみはなむといひし人つくりはし
めて候、又かみはきいりんと申ものす
きはしめて候と申、又おふきははんせ
うよと申ものつくりはしめて候、
又くるまはきいらうと申もの、こはせう
わうの子にたんしゆと申人あんし (15ウ)

いたして、一ねんをかつかへ、はんのめを十二に

わり、又ひと月卅日にたとへ、しろは十

五日まで月のひかりのあきらかなるに

たとへ、くろはしも十五日よりやみにたとへ、

合て三十のいしとす、きおひおくれはせけん

のさためなれ、むしやうにたとへ、そのほか

きほうもんあり、又よろひはととひ給へは、し

やうかつくりはしめ給ひて候、又くむゐは

はくやくかほりそめてさふらふ、又てらみや

はかんのめいてひのときよりつくりはしめ

給ふと申、をよそないてんけてんを一事

もくからすしてこたへて申けるほどに、

ゐんをはしめまいらせて、をのくその

さにつらなれる人、あさみほめぬ

人はなかりける、(16才)

るんは、これをちかつけたまふこと
おそろしくおほしめしけれども、

たい一のひしんなれは、御心さしぶか
かりけるに、おもはざるに、きよく
たいふよりの御けしき、よのつねの

御かせのけともおほえさせたまは

す、日にそへつゝおもらせ給ふ、てむ

やくのかみをめし御たつねありけ

れは、この御のうはつねさまの御こ

とにあらず、御しやにてわたらせ

おはしますとおほえ候と申、さらは

いんやうのかみやすなりをめしうら

なはせられよとて、やすなりをめ

してうらなはせられければ、やす

なり申やう、この御なうにつけて

(1才)

御大事いってきたりぬとそんし候、

御きたうをはしめらるへしとそそう

しける、しやうけ大きにおとろき

たまひて、きそうかうそをしやう

し、大ほうひほうの御きたうあり

けれども、つゐにそのしるし

おはします、いよくおもらせた

まへは、たまものまへかておとりた

まひつゝ、むしやうさかひなれは、を

くれさきたつならひをは、さて

もかねてよりおもひしとは

いへども、いまわかれんとおもへは、

ひつめつのたうにまよひなかき

わかれをわすれぬへきよしおほせ

ければ、たまものまへ申けるやうは、

(1ウ)

われらていのほんぶに、かたし
けなくせうてんをゆるされまい
らせ候のみにあらず、あまつさへ
てうあひをかうふり候事、これ
くわこのかひきやうありかたく
おもひ候、あわれまんこうもたも
たせおはしませかしとこそ、きね
ん申さふらふところに、なにごと
もおはしまし候は、一日へんし
も世になからふへしともおほ
えすとて、なみたをなかし、ふし
しつむはかりなり、さていろくの
御りうくはんまたはやくいのかみ
あまためされて、御たつねあり
けるに、やすなり申やう、かんもん

(2才)

のさすところ、いきい申あけたく

候へども、もし急いりよにそむき

申候はんとしんしやくつかまつり候

と申、くきやう一とうにのたまひ

けるは、はゝかるところなく申あ

くへきよしおほせらるゝあいた、

そのときやすなり 申やうは、

御なうは へちのしさい候はす、

たまものまへの わさにて候、

この人うしなひなは、 やかて

御へいゆふ あるへしと (2ウ)

申ければ、御なふは さて おきぬ、

これを のみ なけき あへり、

かさねて 御たつねありけるに、

やすなり申やう、

しもつけの 国なすのと 申ところに、

八百さいを へたる きつねなり、 たけ八尺

け七いろ をふたつ

御さ候なり、 このものゝわさと申けり、 (3才)

そもくゆらいを申せは、にんわう
きやうにとかれて候むかし、てんちく
にわうあり、なをはほんそく大し
と申なり、けたうのけうくんに
よりて、千人のわうのくひをきつて
はかのかみにまつりて、そのくら
ひをとらんとこゝろさして、すまん
のりきしおにのわうをあつめて、
わうしやうへをしよせ、わうをからめ
とるほとに、九百九十九人のわう
をつけとり、いま一人のわうかけた
り、これよりきたへ一万里ゆきて、
わうあり、なをはふみやうわうといふ
をとらへて、かすにみてたまへと申、
さらはどてつかはして、わうをとり
(4ウ)

ぬ、みな一とにくひをきりて、はかの
かみにまつらんとしけるところ

に、ふみやうわうたいしに申やう、

ねかはくは一日のいとまをゆるし

給へ、三ほうをらいし、しもんをくやう

せんと申ければ、一日のいとまをゆる

されぬ、くわこの七ふつのほうにより、

百人のそうをしやうして、はんにや

はらみつをよませしに、たい一のほ

うしけをといはいはく、こうしやう

しゆんこむ、けんらんとうねんととき

ぬ、ふみやうわうこのけをきゝて十

二ゐんゑんをさとり、はんそくたいし

もおなしくちやうもんして、たち

まちにあくしんをひるかへして、 (5才)

千人のわうにあひて、もろくのとか

あるにあらす、われげとうにすゝ

められて、あくゐんにひかれぬ、

いまはをのくほんごくかへりたまひ

て、はんにやをしゆきやうして、ふつ

とうなりたまへとて、かへしたまひ

ぬ、はんそくたいしもたうしんを

おこしたまひて、しやうほうをえたる

と見えてさふらふなり、むかしはん

そくたいしはかのかみといふは、いま

のきつねにて候なり、ふつほうの

いりきによつて、くひをきらさる

あひた、はかのかみふつほうをかたき

として、しやうくをふるとも、きつね

のみをうけて、ふつほうはんしやうの (5ウ)

こくどにけんして、かういのうねめ
となつてちかつき、わうのいのちを
うはい、われくにのわうとならんと
ちかひけるなり、にほんはそくさん
のせうこくなれとも、ふつほうはん
しやうのくにたるあひた、いまあら
はすへし、これすなはちたまもの
まへなりと申あひた、ひそかに
このことを そうもんしけれとも、
御しんようなかりける に、
みなくいかゝせんとひやう
ちやう あり けるに、 (6才)

やすなり申やう、たいさんぶくのまつり
をつかまつり候はん、たまものまへを御

へいとりのやくにいたさせ給へと

申あひた、しかるへしとて、しゆく

のものをこしらへまつらんとしけ

るとき、たまものまへをへいとり

にちしやうしするところに、この女

はう、かほのけしきそんして申やう、

いやしきとは申なから、かたしけな

くもわういにちかつきたてまつり

しものなり、それさいれいのへいとり

と申は、いやしきけちよしもへのやく

とうけたまはり候へ、さしもおほき

人の中に、われ一人にかきりてはち

をあたへられ候かと、いこんふかけに

(7才)

申に、大しんの給ひけるやうは、しやく
よしの御やうしは、さうこそくそうしやう
をもつてときのきつけうをさため、
としと月と日ときとそうしやう
するをもつて、きたうのしやうしゆ
とす、ゐん中になん女のかすありと
申せども、そうしやうせさせ給ふ
によつて、おんやうのかみさしたて
まつる、そのうへきよくだいつゝかな
くおはしまし候はんこそ、御みも御み
にて候はんつれ、いかやうのいやしき御わ
さも、なにかくるしく候へき、御なう
へいゆふのため、たいさんぶくのへい
とらせたまひて候はんする御ごころさし
こそ、かむし候はんに、すへて御身をは
(7ウ)

そしりはさぶらふまじと申され

ければ、そのときたまものまへは、

たうりにせめられつゝ、そのきな

らはいかやうにもおほせにしたか

はんとて、いてたちけるとこそき

えける、けふをはれと しやうそく きつゝ、

すてに へいを とりて さいもんを

よみけるなかはに、 御へいをうちふると

見えて、 いろへんしてかき

けすやうにうせにけり、 (8才)

やすなりか申ところすこしもたかは
す、かのきつねをうしなひ候へきと、
みなくせんきあり、ぶしをあつめ
てからせはやといふ人もあり、ま
たあるくきやうのせんきには、
ちくるいといひなから、てんぢく
しんたん日ほん三ごくにけんけ
して、しんつうじさいをゑたるもの
なり、ふつりきほうりきにても
しりそけかたし、いはんやほんふの
ちからにてはかなひかたしと申
されける、またあるくきやうの
せんきには、ほとけのときえた
まはぬしゆしやうをも、ほんふのよ
りてけとしたることもあり、わか

(9才)

てうてはけのあらはるゝは、日本
にてうすへきゆへなり、ゆみやの
なをえゆみをいるほどのものなど
いとよめさるへき、かんでうのけいかは、
九の日をいととし、しんのしくはう
は、かすみのかりをいとし給へり、
いまも日ほんになをえたるゆみ
とりをあつめてからせんに、なに
のしきいのあるへきと申されければ、
をのくもつともこのきしかるへ
しとてさたまりける、さるほど
に、いてをたつねられけるに、かつさ
のすけみうらのすけりやう人に
さたまり、いんせんをそくたされけ
るに、りやうすけきやうすいして、
(9)ウ(

しやうゑにたてゑほしをぢやへ

し、ひなまつきへ三とはいして

うけとり申ける、とうこくにゆみや

とりおほしといへとも、身にあてゝ

ゐんせんくたさるゝ事、いゑのめん

ほくときのめいよ、なに事かこれ

にしかんや、みな一人ものこらす

かのところへかけいてゝ、ゆみのひしゆ

つとつくすへしとて、いゑのこ

らうとうをめしつれて、われさき

にとかけてけり、かの野^のを見る

に、へうくとしてくさふかく、人

のわけ入へきやうもなし、しかり

といへとも、すたをもつてくさを

きりはらひかりのけ、むまにま (10才)

かせてかけ入ける、おのくひしゆ

つとつくして、かけまはすと

ころに、いかにも 大きな

おの ふたつある

きつね、くさむら の中より

はしりいたり、りやうすけの ちうまつとも、

われさきにくと かけまはせとも、

かのおふたつある (10ウ)

きつね、 しんつうを

えたる もの

なれは、 ゆんてに

あへは めてへ

きれ、

めてに あへは

ゆんてに

きれ、 したを

くくり、 むくう

しさい に

はしり ける、 (三才)

かのきつねは、しんつうじさいなる

あひた、つゐにをいうしなひ

ける、そのときひとくわれらか

ゆみのふんにてはかなふへからず、く

にへかへりてゆみのはかりことをめ

くらし、そのうちかるへしとて、

めんくにいゑくにかへりける、

かつきのすけかはかりことには、はや

きむまにまりをつけて、まりのお

つるところをやところとして、かけ

まはしけり、みうらのすけかはかり

事には、いぬはきつねににたるもの

なれはとて、いぬをかけさせて百日

けいこして、やところをおほへ、そのへ

ち又なすのおもむきて、いま (12ウ)

をさうことかりまはしけるに、な
をくかりえすして、七日なとよどろ
りうす、しかれはいゑのこわかたう
もみなくくたいくつす、そのときりや
うすけひやうちやうするやうは、
此ことによりてわれくなくゆ
みやにきすをつけんこと、しやう
かひのちそくこれにしくへからす、
こころのはやることは、はんくはいち
やうりやうにもをくらしとおもひ
けれども、むせんのせうふにも
あらざれば、いのちをうしなふにも
あらず、しよせんこのきつねをかり
えすは、ほんこくにふたとひかへる
へからす、ゆみやをすてとさんりん
(13オ)

にましはり、うちかみをすてた

てまつる身となるへし、なむにつほん

こくちうの大小のしんき、そうし

ていせてんしやうくほう大神^{しん}八まん

大ほさつうつのみやの大みやう神、

みやうにちの中にきつねをわれ

く／＼かてにかけてかりとるやうに御

なうしう候へ、いかなるしんつうしき

いのきしんなりとも、わうゐにお

それさるへき、われく／＼をほんこくに

かへし給ふへき、しんへんをもつ

てつげしらせたまへと

きねんし、すこしまとろ

みたる みうらのすけかゆめに、 (13ウ)

としのよはひはたち はかりの女ほう、

見め かたち すくれたるか、

なみたをなかして申やう、 こんとはからさるに、

いのちをうしなはんと うらみの中の うらみなり、

わかいのちを たすけたまへ、

しゝそんくまほりの

かみとならんと 申ければ、 (14オ)

みうらのすけ夢ゆめのうちには、まつた
くわたくしにあらす、ちよくちやう
のおもむきなり、われをうちむる
ことなかれと申とおもへは、やかて
ゆめさめぬ、さて人々をちかつけ
て、まとろみたるゆめにふし

きのゆめを見る、こんにちきつねを
とくめんことあむのうちなり、はやく
うちたてやとて、おのくかのくへかけ出
て、かりまはすところに、かのきつねのより
山へむかひてはしりいらんとするとこ
ろを、みうらのすけゆんてにあひつけて、
そめはのかぶらやをもつて、ちうにいを
としける、ゑたりやとやこえしてみれば、
きくしよりのもおひたらしきものなり、 (15才)

これを持ってよるひるいそぎのほ

り、はやく御めにかへ申さんと

て出にける、みやこにていそぎたいりへ

上にけり、ゑいらんありて、せんたいみ

もんのことなりときよかんのあまり

に、なんちなすのにてかりたるしやう

そくをたかへすして、御まへにてふる

まふへしとて、あかきいぬを一ひき

いたされたり、さるほとにりやう

すけ、よきむまにきんぷくりんの

くらをきて、きりふのやをひ、しげ

とうの弓にそめはのかふらやつかひ、

かけまはす、あん中の上下これを

けんぷつし給ひぬ、さてこそたうし

までも、いぬをものとなつけしかは、

(16才)

きつねはほうなうにおさめられたり、

くはしき事はきつくにあり、

一、きつねのはらの中に、こかねたう

あり、このたうにふつしやりあり、これ

をあんへめされける、又ひたいにしろ

きたまあり、よるひるてらすとく

あり、これはみうらのすけとるなり、

一、ふたつのおのきぎにけんあり、

一はしろし、ひとつのおはあかし、

しろきおは、かつきのすけとる、

いまひとつのあかきおは、

ちなひにおさめる (16ナ)

そのとちに、かつきのすけはへいけ

をうらむる事 ありて、

このつるきを いつの国くに

におはします ひやうへのすけとのに

たてまつる、 そのすひきうに かりて、

世をとり給ふ、 (17ウ)